

## 89 発達障害児に対する支援を行うにあたって

～児童発達支援センターで研修の報告と今後の課題～

病院 リハビリテーション部 理学療法士 田中 亮造、別役 訓子  
作業療法士 山本 正浩、木村 麻美

### 【はじめに】

当院では平成 27 年度の組織目標に「児童精神科患者に対するケア方策の構築を図る」と挙げられているように、発達障害児に対する支援の充実が期待されている。それに先駆けて、今回 4 名のセラピストが児童発達支援センターで研修を受けた。そこで、今回の研修内容を報告し、併せて今後当院で発達障害児に対する支援を行うにあたっての提案をする。

### 【研修内容】

都内にある児童発達支援センターでPT2名、OT2名が5日間、研修を受けた。この施設には0歳から小学3年生までの、約300名の発達障害のある、もしくはそのリスクのあるこどもが通園している。障害福祉サービス受給者証を取得しているこどもは「毎日通園」、「親子通園(週2日)」、「放課後デイサービス(年10回)」などの支援が受けられるが、受給者証が未取得のこどもは、自費で学習支援教室を受けられるに留まっている。施設内は興味を示したこどもが自発的な活動をすることに対応できる環境(遊具、部屋の作り)を備えている。主な研修内容はグループ訓練、個別訓練の見学・補助を通して療育の目的・対応方法・こどもの今後の課題など専門的な技術を学ぶことであった(図1)。こどもの行動評価は設定された環境の中での観察が基本であり、定型的なテストバッテリーは重視していないのが特徴であった。また、家族支援も重視しており、こどもへの対応方法の指導や情報提供に時間をかけていた。

### 【支援内容の提案】

当院が今後、発達障害児に対する支援を行うにあたり、診断がついていないこども(受給者証が未取得、親の判断で適切な支援を受けられていない)や乳幼児期に適切な療育を受けることができず、受けていたとしても成長に伴い通常の社会生活の中で問題が生じたこどもを対象にすると良いと思われる。そのようなこどもを対象にして評価・訓練を提供している病院や施設は少なく、それを医療の枠組みの中で提供することで地域の行政サービスの充実を図ることができる。また、現在当院で実施している高次脳機能障害者の家族を対象とした学習会のノウハウを参考にし、家族支援もできる可能性もある。それらを進める上で課題として、一つ目にスタッフのスキルを充実させることが挙げられる。成人とは異なる関わり合い方であることに加え、行動観察を短時間で正確に行うためにはこどもの行動を誘導する技術が必要である。また、限られた時間の中で評価結果を保護者に適切に伝えなくてはならない。さらに、行動観察するにはこどもが自発的に活動でき、安全が確保された環境の整備が必要であると考えられる。

## 理学療法・個別・親子通園

ダウン症、2歳、女児、頻度週1

### 評価

- ・立位時膝伸展位傾向。
- ・いざり移動。
- ・靴下や靴を自分ではきたがる。



### 対応

- ・膝立ちにて体幹、臀筋群にアプローチ
- ・母親へ指導：足のボディイメージができ始めている。手伝いながらはき終わるまでの一連の動作を完結する。
- ・目標：屋内歩行自立

## 集団・親子通園 毎週月曜日13:45～

精神発達遅滞+多動症 6名 4・5歳児

### 評価

- ・できないことはしたくない
- ・力の加減ができない
- ・注意が持続しない(10秒程度で転導する)
- ・誰かと一緒に活動するよりも自分の好きなことだけをしたい

### 対応

- ・遊び：魚釣り  
2人1組で水の入った桶を運んでプールに水を満たす  
釣竿でそっと魚を釣り上げる
- ・母親への指導：遊びを通して認知・運動を自然に促すことを指導し、今日の活動の目的を伝える。

図1. 研修で見学・補助した訓練の例